
ha**灰**ik**界**ai

カドタク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

h a i k u 灰界 a i

【Nコード】

N 4 5 8 1 E

【作者名】

カドタク

【あらすじ】

灰界 それは 世界の影 何所にでもあり、人の
負の感情 が噴きだまる闇の世界。その世界では人の悪意、怒り、
悲しみ、殺意……………人の暗き感情がさまざまな形をとり表の世界
表界 を蝕もうと暴れている。この世界は 影 であり、人には知
覚できないモノ……………だが、そんな中に影の世界に干渉する者達が
いた。 普通以上の感覚を持つ者 それは 能力者や起源
覚醒者、異能者 など、人でありそれ以上の者達……………これははそ
んな世界、 灰界 で戦う少女少女の物語である。

第一話・影史（前書き）

冷やし中華……じゃなく二作目はじめましたw
今回はバトルものです……多分。
と・に・か・く！楽しくよんでください

第一話：影吏

小さい頃俺は独り言が多い子供だったらしい。
だけど俺は一人で居た事なんてなかったと思う。
だっていつも俺の側には必ず女の子と一緒に居たから……

小さな公園の噴水に小さな少年が覗き込んでいる。
周りに人影はなく、只声だけが二つあった。

「ねえエイリはこのセカイが好き？」

「うん好き。だって友達といっぱい遊べるもん」

何処からもなく聞こえてくる声に少年は疑問を抱く事なく当たり前
の様に答えた。

「ふーん、私は余り好きじゃないかなあ」

「なんで？」

姿無き声の返事に少年は噴水の水面を覗きながら首をかしげる。

「エイリ、このセカイってコワレかけなんだよ？ いっぱい《綻び》
があつてツギハギでそこから黒いのがうじゃうじゃで気持ち悪い」

「それはやだね」

「うん、今も黒いのがそこから出てきそうで怖いんだ私」

「僕がコウちゃんのこと守ってあげるよ。正義の味方みたいに黒い
のから守ってあげる」

「ホントに守ってくれるの？ エイリ」

「うん、コウちゃん守る」

「約束だよ？ だけど《守る》のは私の《役目》だよエイリ」

少年は水面と話続ける。

そこには少年と同じ顔をしたナニかが映っていた。

《AM07:30》

ピピピッピピピッピピッ (目覚まし音)

「うっ、…………… っう変な夢見たな、ふあっ」

影吏は寝癖のついた長い髪を掻きながら冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出しテレビをつけた。テレビからは相変わらず殺人やら事故だの悪いニュースばかり流れている。

影吏はニュースを聞きながしながら朝食の準備を始めた。

今日の朝食はフレンチトーストとシーサラダだ。食卓の上にはそれが3つ置かれている。

ちようど出来上がった所でいつもの二人がやって来た。

「おーすっ、影吏生きてっかー？」

「もう！春君！生きてるに決まってるでしょ！冗談でもそんなこと言っちゃダメだよ！あつ、影吏オハヨだね」

この二人は俺の親友でハッハル筏春とハルナ春菜ついでにこの二人は付き合っている。

「ああ、おはよう二人とも。朝食出来てるよ」

影吏は笑顔で二人を招き入れた。

「腹減ったーっつと、おっ今日はフレンチトーストとシーサラダ！朝からこっつてるなあ」

筏春はさっそくトーストを食べはじめた。

「毎日ごめんね。作ってもらっちゃて」

「いいよ好きでやってる事だし。それに食事は皆で食べた方が美味しいね」

影吏と春菜も席について朝食を食べた。

「ああそつだ影吏昨日の夜さ、桜丘公園の方に行かなかつたか？」
不意に筏春が影吏に話しかけた。

「桜丘公園？いや昨日はずっと家に居たけど？どうして？」

「いや、それならいい。俺たちも学校へ行こうぜ」

今だ？をだしてる影吏の横を通り過ぎ筏春は玄関をでた。

そして、影吏もまた最近よく見る夢と記憶が抜けている事を思い出していた。

第一話・影史（後書き）

第一話は自己紹介みたいなものです。

これから面白くしていきますんで2話目も楽しみにしてください
い (^ _ ^) . .

第二話：世界の影（前書き）

お待ちせしました><；

二話目の投稿です）、、*（

第二話：世界の影

《AM8:10》

朝食を終えて影吏達は喋りながらいつも通り登校していた。

「そつだ！学校帰りどっかよらねー？」

「もう、春君そついうのは登校時に出す話しじゃないよ」

春菜は筏春にそつ言いながらもさつそく何処にしようか考えている様子だった。

「俺は何処でもいいけど？行きたい所ある？」

影吏は二人の顔を交互に見て言った。

筏春も何処でもいいと言いつつ、結果的に春菜の行きたい所で決定とゆうことになったのだった。

ちなみにその春菜だが…未だに悩んでいたりする。

チャチャチャラララ

春菜が悩んでいる間に何処からか陽気な音が鳴り響いた。

「つと、悪いバイトから電話だ」

その陽気な音は筏春のケータイからだった。

「二人共、先に行つてくれ」

そついつて筏春は何処か足早に歩いていった。

影吏は筏春を見届けながら「じゃあ先行つてようか」と春菜に言て歩き出した。

「……………」

「春菜？」

春菜から返事が無く、影吏は後ろを振り向き春菜の顔を覗いた。すると気づいたのか、春菜は慌てて返事をした。

「えっ、あつ、そだね先行こ。春君も困ったもんだよね」
春菜はアハハと苦笑しながら早歩きで学校へ向かった。
あの沈黙の間、春菜が険しい顔をしていた事に影吏は気づく余地もなかった。

《AM8:20 筏春》

筏春は人気の無い所でケータイを取り出した。
ディスプレイには非通知と表示されている。
それを見て不機嫌な顔で通話ボタンを押した。

「用件はなんだ？」
普通、非通知からかかってきたら大抵の人が出ないか、もしくは相手を確認するだろう。

けれど、筏春のケータイに非通知でかけてくる者は一人しかいないのだ。

「開口一番にそれか？もつと対応とゆうものを学んだらどうだ？」
電話の相手は慣れてるのか余り気にしていないようだ。

「お前に使う時間なんてない。切るぞ」
筏春の顔はかなり苛立ちが見えている。

「何寝ぼけた事言っている。あるだろ？私に報告する事が」
「…」

「なんなら他の者に任せるが？」
筏春は苦い顔をして諦めた様に答えた。

「今の所は特に変わった事は無い。影吏は一般人だ、灰界を知らない！」

「だが灰界が発生し、何故かスグに消滅する現象が起こる所に多くそいつの目撃者がいる。なによりあの《逆神》だぞ？お前だって知っているだろう」

「ああ、知ってるよ。闇の歴史にその名ありってほどだからな。けれど影吏がそうだとゆう訳じゃねえ」

「だからこそ監視してるんだよ。彼がああ《逆神》かどうかをね」
「ちっ、もう報告は終わったから切るぞ」

筏春は電話を切ろうとした。

「ああ、最後に言っておくが………もしも場合はわかってるな？」

「……」

筏春は何も言わずに電話切った。その顔は暗く沈んでいた。

《AM8:45 学校屋上》

影吏は授業を受けずに屋上にいた。

ただ、鋭い目で何も無い空間を睨んでいた。

いつもの影吏とはどこか雰囲気が違うていた。

影吏はポケットからカッターナイフを取り出し、その何もない空間を切りつけた。

すると、切りつけた空間から急速に全てのモノが色褪せていき、切りつけた所を中心に球状の色褪せた空間ができた。

否、それは 灰界 と言う世界から隔離された空間だった。

全てが色褪せた世界の中、影吏だけが色褪せていなかった。

ただ、眼だけが爛々と蒼く輝いていた。

影吏が見つめる先に、今まで居なかった黒き霧を放つ異形の怪物が多数いた。

AM8:45 教室

春菜は少し怒っていた。

理由は筏春と影吏にある。そう、二人とも教室にいないのだ。

筏春は登校中、影吏は学校に着いてすぐにいなくなってしまったの

だ。

電話でもしてやるのか？と思ったが不意に頭上から感じなれた嫌な気配が覆った。

そう、灰界が現れた感覚だった。

春菜は急いで筏春に連絡を取るため教室を出て行った。

AM 8:50 学校屋上

複数の寄生虫のような怪物が影吏に襲いかかった。

影吏は静かに見据え跳躍。そして、着地と同時に一匹をカッターナイフで切りつけた。

切られた怪物は断末魔を叫びあげる。

それに応答するかのように、全ての怪物が四方八方から影吏に襲いかかる。

影吏は前方に迎え撃ち、横薙ぎに一閃。同時に左右の怪物も切りはらった。

怪物はそれだけで動かなくなった。

ただのカッターナイフでやられるようなモノではないのだが、影吏が切った怪物は朽ち果てるかの様にボロボロと崩れ去っていった。5匹目を切り倒した時、ドアから二人の人影が入って来た。

その二人の顔は険しく、どこか悲しそうな表情をしていた

第三話：屋上の灰界（前書き）

長らくお待たせしました（、・・・、*）
毎回、同じこと言ってる様な気が（汗）
と、兎に角第三話！お楽しみください><；

第三話：屋上の灰界

春菜は校門の前で待っていた。

灰界が現れてから筏春と連絡をとり待っている所だ。

「あの灰界…影吏なのかな。違うよね。うん、きっと違うよ」

春菜は不安から独り言をつぶやいたが、心に巣くう不安はまったく消えてくれなかった。

そうこうしてる内に筏春がやっとやってきた。

「悪い、何分たった？」

筏春は開口一番に時間を訪ねた。

勿論、今の時間ではなく灰界が現れてからの時間だ。

「ざっと10分位、適応するまでまだ大丈夫だと思っけど…早く行った方が良くと思う」

筏春は春菜の言葉に疑問を抱いた。

「どうした？いつもの春菜らしくない」

「うん、わかってる。けど、怖い」

「怖い？」

「影吏がね、いないの」

「ホント…なのか？」

「うん、学校ついてスグにいなくなっ…」

筏春と春菜はいそいで屋上へと向かった。

AM 8:50 屋上

筏春達は屋上のドアを開くと、其処には筏春達が最も望んでない後景がひろがっていた。

「ああ、何でお前が…」

「…影吏君」

筏春と春菜はただ悲しかった。目の前の真実が。組織 である自分たちはヤルことしなければならぬ。

「影吏！」

筏春は大きな声で名前を呼んだ。

そして、影吏も筏春と春菜に気付き振り向いた。

その時、筏春と春菜は背中に冷たいモノを感じた。それは、影吏の眼を見た瞬間だった。

「邪魔をするのなら…殺すよ？」

「影吏：聞かせる！お前は 組織 なのか!？」

「組織？私が？違うわ」

「よかった。違っつて春君」

春菜は影吏の返事に安堵していた。が、筏春はもうひとつ知らなければならぬ事があった。

「逆神…：なのか？」

少しの間の沈黙、その間に一匹が影吏の背に襲いかかった。

影吏はまるで見えているかの様に真上に飛び、落下の勢いでカッタナイフを突き刺し答えた。

「ええ、そうよ」

刺された怪物が音もなく崩れていった。

「そうか…」

筏春は唇を噛み締め、一瞬の間に影吏の背後に回った。その手には、いつの間にか銃が握られていた。

「影吏：俺は組織からお前が逆神だった場合、連れ帰るか抹殺する命令をされてんだ。だから、おとなしく来てくれ」

筏春は影吏の背に銃を押し当てた。すると、急に影吏は笑いだした。

「ははっ、あはははは」

「っ、何がおかしい影吏！」

影吏は笑いを堪えながら答えた。

「ははっ、抹殺？私を殺すって？あはは、殺れるのなら殺ってみな
「よ」

笑い続ける影吏に筏春はさすがに怒りを覚えた。

「状況を解ってるのか！影吏！」

「色々、解って無いのはお前だよ。逆神の事知ってる様だったから

黙ってたけど…逆だったのね。何も解ってない。それで私の動きを封じたと思ってるなら大間違い」

影吏は言い終わった刹那、筏春の喉にカッターナイフを押し着けていた。

「何か喋ったらどう?」

影吏は筏春の表情を楽しむかの様に問いかける。

「このまま横に引き抜いたらどうなるかしら、ねえ?」

「や、止める…影吏」

喉に当たる冷たい感覚に筏春は冷たい汗を感じた。

すると、意外にもあっさりと影吏は筏春からカッターナイフを離れた。

「殺さないよ貴方達は、殺したら影吏が壊れる」

影吏が壊れる?

筏春は影吏の言葉を疑問に思ったが、スグに言葉の意味にきずいた。違うのだ、喋り方、行動、性格、全てが普段の影吏とは違った。

『なら…目の前にいるコイツは誰だ?』

そう思った瞬間、突如異変が起こった。

灰界が急速に広がり始めたのだ。

「な、何が起こってる!？」

筏春達が動揺してる間にも、どんどんと灰界は広がっていく。周りにいた怪物達もいつの間にか姿を消していた。等々、灰界が学校全体を包み込んだ。突如、グラウンドから身を響かすほどの咆哮が響き渡った。筏春はすぐさまグラウンドを見る。すると其処には巨大な黒い影が佇んでいた。

第三話：屋上の灰界（後書き）

と、取りあえず頑張ろう・・・私（；――）

第四話：洸（前書き）

ボス？バトルです（笑）

影吏？が活躍してます…多分（マテ

第四話：洸

オオオオオオン

グラウンドから鳴り響いくソレは巨大な黒き獣だった。

「っ、ケルベロス！」

筏春は驚きと焦りを混じり合わせた声で呟く。
春菜も慌てて筏春のもとへ走りながら答えた。

「さっきのワーム達といい、変に数が多いと思ってたけど...どうし
よ、春君」

春菜は今も泣きそうな顔をしている。
そんな中、影吏だけが平然としていた。

「のんびりしてたから大物が嗅ぎ付けちゃったみたいね」

影吏はグラウンドを見て不適に笑った。

「ケルベロスは5人でやつと倒せる相手だぞ。部が悪い！此処は一
旦、外から要請を」

筏春が言い終わる前に影吏は屋上から飛び降りていた。

「なっ！」

「影吏君！」

筏春達が驚くのも当たり前だ。この校舎は4階建て、その屋上から飛び降りたのだ。

「影吏！」

スグ様、筏春は下をみる。すると、影吏はまるで猫の様な身軽さで軽々と地上に着地していた。

「くそっ！びっくりさせるなよ。春菜、俺らも行くぞ」

「えっ、あ、うん」

筏春達は急いでグラウンドへ向かった。

「久々に手応えありそう」

影吏は巨大な黒き獣を前にしてカッターナイフを構える。黒き獣ケルベロスは影吏を睨み、低く唸っている。まるでお互いの隙を探り入れるかの様に睨み合う。先に動いたのは影吏だった。

まるで疾風のごとく、猛スピードで駆け走った。

ケルベロスも瞬時に飛びかかる。

が、影吏は高々に跳びすれ違い様に一閃を放つ。

ケルベロスは怒りか痛みか、咆哮をあげ影吏から距離をとった。

「あら、距離をとった。なかなか知的なわけだ」

ケルベロスが影吏を睨み動こうとした瞬間、数回の発砲音が鳴り響いた。

「大丈夫か！影吏」

筏春は発砲しつつ影吏の側に移動する。

影吏は何処か面白味を無くした様に筏春を見た。

「邪魔しないでよ。あーあ、興が削がれたじゃない…まあいいわ、さっさと終わらせちゃお。あんた達、アレ足止め出来る？」

影吏はケルベロスを指差して、筏春と春菜を交互に見て言った。

「俺と春菜とでなら…短時間だが」

「三秒もてばいいわ。三秒たったらアレから離れなさい」

「三秒…？解った。春菜、やるぞ」

「うん、春君」

筏春は流れる様な動作でマガジンを装填し、春菜は手に特殊な手袋を着けた。すると、春菜の手からバチバチと青い電流が放たれた。

「へえ、能力者なんだ」

影吏は春菜を見て呟いた。

春菜は照れながら肯定した。

「えへへ、水があれば本領発揮できるんだけどね」

「呑気に喋ってねーで手伝え！」

影吏と春菜が喋ってる間、筏春は必死にケルベロスと戦っていた。

「あつ、春君ごめん。応戦するね」

春菜は雷球を作り出しケルベロスに向かって解き放つ。同時に筏春も両手に銃を構え乱射した。影吏は目を細めケルベロスを見据える。

「…見えた」

三秒、影吏は残像を残し疾走。ケルベロスの間を駆け抜けた。その間わずか一秒、見えた斬光は12回。ケルベロスは声をあげる間も無く崩れさった。

「…嘘だろ」

筏春は驚いていた。春菜も同様に驚いた。ケルベロスは5人で相手しないと倒せないほど強さだ。

それを影吏は瞬殺した。それも対灰界用の武器ではなく、只のカッターナイフで………

筏春は影吏に底知れぬ恐怖を覚えてしまった。

宿主を殺され、灰界は徐々に姿を消していった。

筏春は灰界の消失を確認すると影吏を見た。

影吏は何処か不機嫌な顔で辺りを見回している。

筏春は今疑問に思っている事を明かすため口をひらいた。

「で、お前は何者なんだよ？影吏…じゃないよな」

「ええ、私は洗^{ユウ}。逆神の戦闘人格。影吏の陰性に位置する者、つまりは影吏の中にある女性的部分よ」

「逆神の？二重人格って事か？」

「そう、私は影吏を守るための人格よ」

「じゃあ、もう一つ。あの力も逆神の力なのか？相手を崩す力」

「ああ、アレは別。私個人の力よ。私、異能者なの」

「なるほどな。じゃあ最後に聞くが…」

筏春は、最も重要な事をここで聞くことにした。

「影吏：いや、洗。俺らの組織まで来てくれよ」

「来なければ影吏に危険が及ぶ…か、良いよ行ってあげる。けど、最終的に決めるのは影吏だからね。それに…」

「どうかしたか？」

影吏はざっと周りを見て言った。

「10人、お前の仲間に囲まれてるみたいだしね」

「なっ」

「えっ、春君。そうなの？あっ」

春菜が筏春を見たとき、視界に意外な人物が映りこんだ。

「やあ、ご苦労だったね。ハルハル」

そこには、いつの間にか小柄な女性が立っていた。

「さすが逆神、全て見せてもらったよ。見事だった。付け加えるなら異能者でもあったとわね」

小柄な女性は軽く拍手をしながら寄って来た。

「なんで…アンタが居るんだよ」

筏春は冷や汗をたらしながら小柄な女性に言った。
春菜も何処か小柄な女性を畏怖している様子だ。

小柄な女性は気にもせず軽い口調で筏春を見て言った。

「ん、筏春、君がいざって時にちゃんと出来るか心配だったからね。君が居なくならない為にも影ながら見てたって訳」

そう言いながら小柄な女性はケータイをひらひらと見せた。

そう、筏春に非通知で電話をかけたのは彼女なのだ。

「初めまして、逆神の者よ。私は葉月、キサラハツキ姫沙良葉月です。以後お見知りおきを」

葉月は洸に、優雅に頭を下げた。

洸はつまんなそうに会話を続けた。

「で、アンタはあたしに何の用な訳？ただ挨拶しに来た訳じゃないでしょ？」

「話しが早くて助かります。逆神の者、我々にその力を貸して頂きたい」

「嫌よ、影吏を危険に晒すモノは殺すけど…自ら危険を犯すつもりは無いわ」

「そうですか…」

葉月が声のトーンを下げた瞬間、周りの空気が重く冷たいモノに変わる。

筏春も春菜も冷や汗を垂らしながら洸と葉月を見る。

「では、賭けをしませんか？もし私が勝った場合、洸さん貴方の力を貸して頂きます。洸さんが勝った場合…そうですね願いを一つ叶えましょう。どうです？」

しばし考えて、洗は不適な笑みを浮かべ答えた。

「いいわ。その話しのってあげる」

「では詳しい内容は後ほど、筏春にでも伝えておきますんで…いいですね？」

「構わないわ」

「では後ほど。ああ、それと筏春、たまには顔を見せにきなさい。みんなもお前達と話したがつてるんだから」

そう言つて葉月は帰つていった。

急な展開に筏春は、未だ信じられ無いと言いたげな顔で洗に話しかけた。

「おい、いいのかよ。あんな約束をして！」

「ええ、楽しくなりそうじゃない」

「でもよ、負けたらお前…」

「勝負の内容は解ってるわ。負ける要素を無くす為にも今から出かけるけど…筏春、貴方達も着いて来たらいいわ。いい物見せてあげる」

「いいもの？よく解らねーけど連絡役だしな。わかった、で何処行くんだ？」

「それは着いて来たらわかるわ」

「おう、じゃー早く行こうぜ」

歩き出した二人に春菜は慌てて引き留めた。

「ちょ、ちよいと二人共！授業は？学校はどうするの！」

慌てている春菜に二人は同時にハモった。

「「は？」

「は？じゃないよぉ、授業サボっちゃまずいよ？しかも私なんか
忽然と居なくなっちゃってる事になるしい」

春菜は目をうるうるとしながら二人に抗議した。

が、この二人に通用するハズがなく…

「だったらあなたは残ったらいじゃない。私は無理に来いとは言
つてないし」

「俺は退屈な授業よりもオモシレー方優先な（笑）」

「そいゆう事よ。じゃ行くわよ、筏春」

「おう」

二人は再び春菜に背を向け歩き出した。

春菜は少しの間、ポカンとしながら泣きそうな顔で追いかけた。

「うう、待って、私も行きますう」

こうして三人は出かける事になった。

第四話：洸（後書き）

どうでしたか？

面白くなりつつある？

と、取りあえず頑張ろう（、・・・*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4581e/>

ha灰ik界ai

2010年10月28日07時42分発行